

小学校時及び中学校時の英語学習に対する意識の変化とその関連要因

及 川 賢 教育学部言語文化講座英語分野

キーワード：小学校、中学校、外国語活動、英語、好き・嫌い

1. はじめに

本稿は小学校時及び中学校時の英語の好き・嫌いの変化とそれに関わる要因を調べた及川(2015)に続く調査である。先の調査が対象者を絞った予備的な位置づけであったのに対し、本調査は対象者を増やした本格的な調査となる。

小学校での英語教育は、正式には「外国語活動」という名称のもとに必修科目として実施されている。「外国語」という表現が示す通り、英語以外の外国語を扱ってもよいことになっているが、現状では英語がほぼ100%を占める状況になっており、また、現行の学習指導要領も英語を原則とすることを明記している。1つの言語に偏っていることに問題はないとは言えないが、世界における英語の役割や教師が教えることができる言語は何かという観点から考えると、今後もこの傾向は継続するものと思われる。本稿では特に必要な場合を除いて、便宜上「外国語」ではなく「英語」と表記するが、これは決して他の言語を軽視しているわけではない。

英語が必修として扱われるようになったのは現行の学習指導要領（小学校編）が全面施行となった平成23（2011）年4月以降で、4年半が経過しているが、「総合的な学習の時間」の一部として英語活動が可能となった平成14年4月から数えれば、既に10年以上の歳月を経ており、指導技術等の蓄積も増えている。

成果が報告される一方で、問題点も数多く指摘されているが、小学校と中学校の接続・連携が不十分であるとの指摘も多い（例えば、英語教育の在り方に関する有識者会議（2014）など）。小中連携において問題点としてよく挙げられるのが、「小学校では英語が好きだったのに中学校では英語で歌やゲームがなく、文法が中心で、嫌いになった生徒が多い」という指摘である。しかし、実際にそのような生徒が数多く存在しているのか、またその理由は本当に「文法中心」なのかは明らかになっていない。

この実態の解明を試みた調査が國友（2012）、井田（2015）及び前述の及川（2015）である。詳しくは次章で述べるが、いずれも中学生を対象に実施したアンケートを通じて小学校時及び中学校時の英語の好き・嫌いの実態を明らかにすることを試みている。本調査はこれらの調査に連なるものだが、対象者数を増やし、統計的手続きの精度を上げて改良を試みている。

本稿を進めるにあたり、前述の通り、特に必要な場合を除いて便宜上「外国語」ではなく「英語」を用いる。また小学校では「児童」、中学校では「生徒」と区別することが基本だが、本稿ではこの区別は対象とならないので、すべて「生徒」と表記する。

2. 関連文献

及川（2015）で概観した通り、小中学校での英語の好き・嫌いを調査した全国的な調査は少なく、

Benesse教育開発センター（2012）がその代表であろう。全国の公立中学校1年生とその母親2,688組にインターネット調査を実施し、小学校6年時と中学校での英語の好き・嫌いを4件法で尋ねたところ、小学校に関しては、「とてもそう思う」が16.6%で、「まあそう思う」が46.3%という回答を得た。これら2つを合わせると62.9%、すなわち約3分の2が肯定的な回答をしている。中学校での英語に関する質問では、学校の英語の好き・嫌いについて「とてもそう思う」が13.8%で「まあそう思う」は43.3%である。これらを合わせた57.1%が肯定的回答であるが、小学校の62.9%をやや下がるものの、大きく開いているとはいえず、本稿の「はじめに」で指摘したような「中学校で英語が嫌いになる」という現象は社会一般での印象ほど多くはない。

調査対象者の規模という点では、文部科学省（2014）が最大級である。22,202人の公立小学校5、6年生と24,205人の公立中学校1、2年生にアンケートを実施し、外国語活動に関する様々な質問に回答してもらっている（管理職や教員も回答している）。「あなたは英語が好きですか」という問に対し、小学生は70.9%が、中学1年生は61.1%が、中学校2年生は50.3%が、それぞれ英語が「好き」または「どちらかといえば好き」と回答している。また、英語の「授業」が好きかどうかに対する質問には、小学生の72.3%が、中学1年生の60.2%が「好き」または「どちらかといえば好き」と回答している（中2の回答結果は報告されていない）。ここでも、小学生と中学生で差が見られるものの、約10%ずつの減少であり、必ずしも英語嫌いが激増しているとはいえない。

上記の2つの調査は規模も大きく、英語の好き・嫌いに関わる貴重な資料を提供しているが、その理由や関連する要因を明らかにしているものではない。これらに直接答えている調査に國友（2012）、井田（2015）、及川（2015）がある。國友（2012）は複数の小学校から入学した生徒が在籍する公立中学校1年生の134名に小学校時の外国語活動（＝英語）及び中学校の英語の好き・嫌いとその理由を尋ねた。まずアンケートで中学生を以下の4つのグループに分けた。

- A：小学校の「外国語活動」が好きだった・中学校の「英語」も好き
- B：小学校の「外国語活動」は好きだった・中学校の「英語」は嫌い
- C：小学校の「外国語活動」は嫌いだった・中学校の「英語」は好き
- D：小学校の「外国語活動」が嫌いだった・中学校の「英語」も嫌い

それぞれのグループの生徒に小学校の時に英語が好きあるいは嫌いだった理由を、また中学校での英語が好きあるいは嫌いである理由を尋ね、5件法で回答してもらった。

英語に対する意識が「好き」から「嫌い」に変化したBグループは全体の13%で、必ずしも高い数値ではない。その理由としては、「新しい単語を覚えるのが難しい」「文章になるとわからない」「単語の読み方がわからない」「テストでよい点が取れない」など「能力」に関わる項目が好き・嫌いに影響を及ぼすことが多いこと、小学校の特徴とされる歌やゲームが中学校で少なくなったことが大きな原因ではないことが明らかになった。一方、小学校では英語が嫌いだったが、中学校で好きになったというCグループのほうが17%と、むしろ数値が高かった。その理由は「文字を勉強できるようになったから」「新しい単語を覚えるのが楽しい」「自分の思いを表現できるから」など、こちらも能力に関わる項目が好き・嫌いに影響を及ぼすことが明らかになった。このように、小学校から中学校への移行における英語に対する印象の変化は否定的（「好き」→「嫌い」）の場合でも肯定的（「嫌い」→「好き」）のいずれの場合でも、「できる・できない」という能力に關す

る要因が影響を与えている可能性が高いことを指摘した。

井田（2015）は757名の公立中学校の1～3年生を対象に國友と同様の調査を行い、同様な結果を得ている。英語が「好き」から「嫌い」に変化したグループは22%、「嫌い」が「好き」に変化したグループは20%であった。こちらは前者のほうがやや多いが、ほぼ同じ数値となっている。井田は記述を主としたアンケートを作成し、回答を自身の基準で分類したのちに集計を行っているが、ここでも、小学校時、中学校時いずれも肯定的な回答のほとんどが「わかる、できる」「楽しい」「有用性を感じる、興味がある」「学外の体験がある」のいずれかに分類できた。否定的回答はこれらの逆で「わからない、できない」「楽しくない」「有用性を感じない、興味がない」のいずれかに分類できた。ここでも「できる・できない」という能力が大きく関わっていることがわかる。

國友（2012）及び井田（2015）は生徒が英語を嫌いになる要因及び好きになる要因を直接調査した先駆的な論文ではあるが、さらに精度を高めるには、比較の対象者が必要であろう。例えば、英語を嫌いになった理由を明らかにするには、小学校時に英語が好きで、中学校時も英語が好きだった生徒たちの回答と比較する必要がある。もし、英語が好きなままであった生徒たちが英語が嫌いになった生徒たちと同傾向の回答をしていたとすれば、英語が嫌いになった理由として挙げられた項目が理由として成立しないことになる（英語が好きになった生徒についても同じことが言える）。この点を考慮に入れた調査が及川（2015）である。前述の通り予備調査的な位置づけのこの調査は57名の中学校3年生に小学校5、6年次の英語（「外国語活動」）と中学校1年及び2年次の英語のそれぞれの好き嫌いについて、國友や井田と同様に4件法で回答してもらった。また、併せて、英語学習に関わる20項目について、以下の形式で、5件法で回答してもらった。

【例】

02【英単語や英熟語を覚えることは得意でしたか？】

	得意だった	やや得意	どちらともいえない	やや苦手	苦手だった
小5～6：	5	4	3	2	1
中1～2：	5	4	3	2	1

調査の結果、英語が「好き」から「嫌い」に変化した生徒は全体の8.8%であるのに対し、逆に英語が「嫌い」から「好き」に変化した生徒の割合は22.8%であった。

また、英語の好き・嫌いを分けた要因として、「単語学習」「英語を話すこと」「英語を書くこと」「英語での会話」が大きく関わっている可能性を指摘した。特に後半の3つは英語のアウトプットに関わる項目なので、及川は「語彙力」と「発表力」が大きく関わっている可能性があると言っている。

しかし、この研究は参加者が57名と少なく、結果の一般化が極めて難しい。また、アンケートの表現にも不統一が見られるなどの不備もあった。これらを改善し、参加者を大幅に増やして実施されたものが本調査である。

3. 研究

3. 1. 目的

本調査の目的は小学校から中学校へ進学した生徒の英語に対する好き・嫌いがどの程度変化する

るのか、またその変化に関わる要因は何かをアンケートを通じて明らかにすることである。具体的には以下の2つのリサーチ・クエスチョンに答えることである。

RQ-1：小学校時に英語が好きだったが中学校時に英語が嫌いになった生徒と小学校時に英語が嫌いだったが中学校時に英語が好きになった生徒の全生徒に占める割合はそれぞれ何パーセントか。

RQ-2：RQ-1で明らかになった2つのグループの生徒たちの変化に関わる要因は何か。

ただし、本調査は小学校時と中学校時のデータを比較するものの、前回の調査同様、それらが好き・嫌いの原因になっているとは言い切れない。すなわち、英語の好き・嫌いの変化や関連する要因に関連があるか否かを見ることはできるものの、因果関係を証明するには至っていない。あくまでも、好き・嫌いの変化の理由の「候補」を明らかにするものである。

3. 2. 参加者

本調査の参加者は埼玉県内の4つの公立中学校に属する510名である。このうち男性は236名、女性は235名、無回答が39名であった。各学校の参加者数は以下の通り。

A中学校：153名

B中学校：190名

C中学校：136名

D中学校：31名

彼らが小学校5年生の4月から小学校5・6年生で外国語活動が年間35時間(週当たり1時間(=45分)相当)の必修となったため、小学校時に2年間「外国語活動」という科目で英語に触れている。また、彼らが中学校に入学する前年の平成24年より現在の学習指導要領が適用されているため、外国語(英語)の年間授業時数が140時間になっている。すなわち、彼らは1～3年生のすべての学年で週当たり4時間の英語の授業を受けていたことになる。

アンケート回答者を中学校3年生にした理由は、小学校時と中学校時の印象を尋ねるにあたり、それぞれの対象期間を統一するためである。小学校時の外国語活動が2年間なので、中学校も同じ2年間(中1・2年生)とした。アンケート用紙にも中学校時の英語及び英語授業の印象については、「中1及び2年次」の印象について回答してほしいと明記している。

3. 3. 調査用アンケート

及川(2015)で使用した調査用アンケートに若干の修正を加えて使用した。表紙で、小学校5・6年次及び中学校1・2年次に英語をどのように捉えていたかを「好き」「どちらかと言えば好き」「どちらかと言えば嫌い」「嫌い」から1つずつ選んでもらった。

小5～6：	好き	どちらかと言えば好き	どちらかと言えば嫌い	嫌い
中1～2：	好き	どちらかと言えば好き	どちらかと言えば嫌い	嫌い

このうち「好き」と「どちらかと言えば好き」は肯定的回答、「どちらかと言えば嫌い」と「嫌い」を否定的回答としてそれぞれまとめ、回答者を以下の4つのグループに分け、本調査の分析の基本単位とした。このうち本調査の主な対象は第2グループ及び第3グループである。

第1グループ：小学校時に英語が「好き」で中学校時も英語が「好き」（好き→好き）

第2グループ：小学校時に英語が「好き」で中学校時は英語が「嫌い」（好き→嫌い）

第3グループ：小学校時に英語が「嫌い」で中学校時は英語が「好き」（嫌い→好き）

第4グループ：小学校時に英語が「嫌い」で中学校時も英語が「嫌い」（嫌い→嫌い）

第2グループ及び第3グループの英語に対する気持ちの変化に関わる要因を探るため、20項目のアンケートを用意した。

本アンケートの特徴は、同様の調査である國友（2012）が英語の好き・嫌いで分類したグループごとに異なる質問項目を用意していたのに対し、小学校時と中学校時について同じ質問項目を使っている点で比較を容易にしている。また、井田（2015）が記述式を中心に行っていたのに対し、選択式を主としている点で、回答のあいまいさを回避できるという利点がある。以下に例を示す（「関連文献」で紹介したものと同じもの）。

【例】

02【英単語や英熟語を覚えることは得意でしたか？】

	得意だった	やや得意	どちらともいえない	やや苦手	苦手だった
小5～6：	5	4	3	2	1
中1～2：	5	4	3	2	1

もし、ある生徒が「小5～6」で「やや苦手」を選択し、「中1～2」で「やや得意」を選択すれば、小学校から中学校へ進む過程での変化を見取ることができる。

アンケートでの質問項目数は以下の通りである。各項目の数字はアンケートに掲載された順序を示す。また、カッコ内は略称で、これ以降の表などで各項目に言及するときに使用する。

○英語学習の得意・不得意に関する項目（11項目）

01はじめて見る英単語の読み方がすぐにわかりましたか？【Phonics】

02英単語や英熟語を覚えることは得意でしたか？【単語】

03英語を発音することは得意でしたか？【発音】

04英語の文法は得意でしたか？【文法】

05英語を聞くことは得意でしたか？【聞く】

06英語を話すことは得意でしたか？【話す】

07英語を読むことは得意でしたか？（→小学校で英語の文章を読んだことがなければ「中1～2」のみ記入）【読む】

08英語を書くことは得意でしたか？（→小学校で英語の文を書いたことがなければ「中1～2」のみ記入）【書く】

09先生や友達と英語で会話をすることは得意でしたか？【会話】

10授業の内容は簡単でしたか？【授業簡単】

11中学校では英語のテストがありますが、テストやそれにより成績がつくことをどう思いますか？
【成績】

○英語学習の好き・嫌いに関する項目（5項目）

12英語の授業で英語の歌を歌うことは好きでしたか？【歌】

13英語の授業でゲームやコミュニケーション活動をするのは好きでしたか？【ゲーム】

15英語は好きでしたか？【英語好き】

16英語の授業は好きでしたか？【授業好き】

20小学校、中学校で使った英語の教科書をどう思いますか【教科書】

○英語の有用性に関する項目（2項目）

14英語を学ぶと将来の自分に役立つと思っていましたか？【役立つ】

17将来英語を使って仕事をしたいと思っていましたか？【英語仕事】

○英語や英語圏への興味（2項目）

18アメリカ、オーストラリア、イギリスなどの英語圏に興味関心がありましたか？【英語圏】

19将来英語を使える国（アメリカ、オーストラリア、インドなど）に旅行や留学をしたいと思っていましたか？【旅行留学】

生徒はいずれも5段階のリカートスケールで回答する。「英語学習の得意・不得意に関する項目」の項目が多いのは、國友（2012）、井田（2015）、及川（2015）でこれらが英語の好き・嫌いを分ける大きな要因であることが明らかになっており、そのため、その中でもどの項目が好き・嫌いを分ける要因としてより重要なのかを明らかにするためである。また、塾や英会話教室など、学校以外での学習方法も回答してもらった。さらに、小学校時や中学校時でそれぞれ印象に残っていること、これから小学校で英語を学ぶ現4年生へのアドバイスなどの自由記述欄も3つ設けた。実際のアンケート項目については付録を参照。

3. 4. 手順

アンケートは2015年5～6月に実施校に配布・実施・回収を依頼した。実施に要した時間は15分程度である。統計的分析の手法はウィルコクソンの符号付順位和検定を用いた。複数の項目を同時に分析する手法には分散分析を使用することが多いが、この使用には少なくともデータの尺度が間隔尺度である必要がある。しかし、リカートスケールは目盛りの間隔が一定であることが保証できないので、本調査では、「対応のある分散分析」のノンパラメトリック検定に相当するウィルコクソンの符号付順位和検定を用いた（竹内・水本、2014）。

4. 結果

4. 1. 英語の好き・嫌いの割合

小学校時及び中学校時の英語の好き・嫌いはそれぞれ以下の通りである（表1、表2）。回答の

中に小学校時及び／または中学校時の好き・嫌いを回答していなかった生徒がいたため、それらは「無回答」に分類した。

表1 小学校時の英語の好き・嫌い

好き	116人 (22.7%)	329人 (64.5%)
どちらかと言えば好き	213人 (41.8%)	
どちらかと言えば嫌い	111人 (21.8%)	173人 (33.9%)
嫌い	62人 (12.1%)	
無回答	8人 (1.6%)	

表2 中学校時の英語の好き・嫌い

好き	106人 (20.8%)	306人 (60.0%)
どちらかと言えば好き	200人 (39.2%)	
どちらかと言えば嫌い	131人 (25.7%)	197人 (38.6%)
嫌い	66人 (12.9%)	
無回答	7人 (1.4%)	

いずれも60%以上が「好き」または「どちらかと言えば好き」と肯定的に回答し、「嫌い」「どちらかと言えば嫌い」という否定的回答は30%台である。全体的な傾向を見る限りでは、小学校時は英語が好きだったが中学校時は英語が嫌いになるという言説を肯定するには至らない。

「3. 3. 調査用アンケート」でも述べたが、小学校時及び中学校時の英語の好き・嫌いに関する回答をもとに参加者を4つのグループに分けた。それぞれの人数及び割合は以下の通りである(表3、図1)。なお、無回答が9名いたため、パーセンテージの合計は100%にならない。

第1グループ：小学校は好きで中学校も好き：232人 (45.5%)

第2グループ：小学校は好きで中学校は嫌い：97人 (19.0%)

第3グループ：小学校は嫌いで中学校は好き：73人 (14.3%)

第4グループ：小学校は嫌いで中学校も嫌い：99人 (19.4%)

表3 小学校時及び中学校時の英語の好き・嫌いの人数

		中学校・英語	
		好き	嫌い
小学校・外国語活動	好き	232人 (45.5%)	97人 (19.0%)
	嫌い	73人 (14.3%)	99人 (19.4%)

* 無回答の9名は除く カッコ内はパーセンテージ

回答者が最も多かったのは、「好き→好き」の第1グループで、全体の約半数である45.5% (232人) が小学校時も中学校時も英語が好きだったと回答している。次に回答者が多いのが、小・中のどちらも英語が嫌いだった(嫌い→嫌い)と回答した生徒(第4グループ)で、19.4% (99人) である。しかし、その次に回答者が多い第2グループ(好き→嫌い)も19.0% (97人) とほぼ同数の回答を得ている。回答者がもっとも少なかったのが「嫌い→好き」の第3グループで14.3% (73人) である。

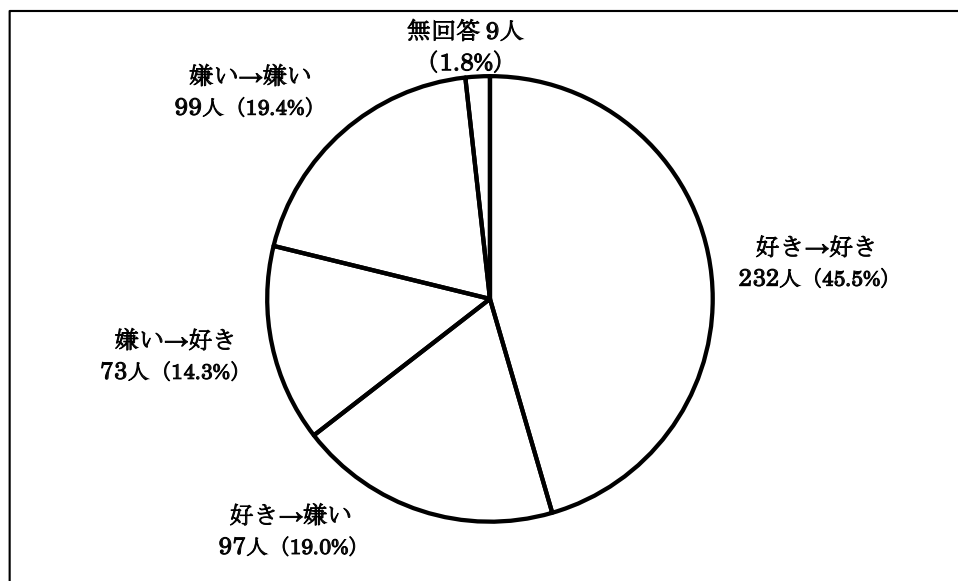
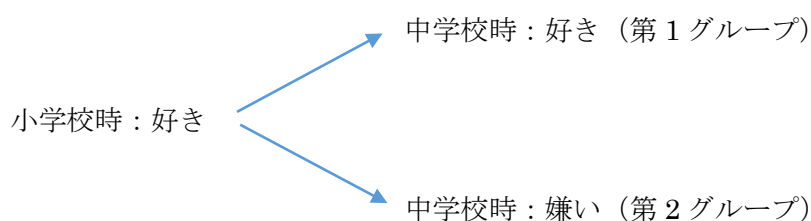


図1 小学校時及び中学校時の英語の好き・嫌いの変化の割合

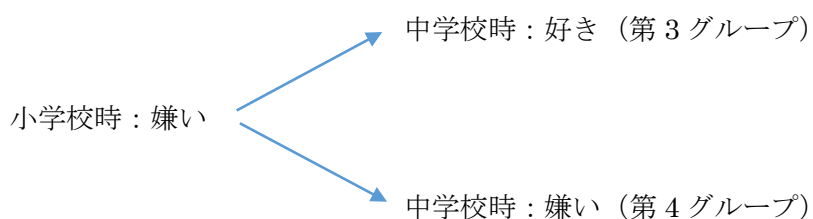
本調査の出発点となった「中学で嫌いになる生徒」は確かに存在するものの、本調査においては、全体の中での割合は19.0%となっており、決して高くはない。逆に中学校になって英語が好きになったと回答している生徒も14.3%存在しており、必ずしも少なくはなく。

4. 2. 好き・嫌いの変化に関わる要因

本稿の目的は中学校に進んで英語の好き・嫌いが変化した生徒の割合とその関連要因を探ることである。そのため、分析の主たる対象は第2グループ（好き→嫌い）と第3グループ（嫌い→好き）となる。しかし、各グループの小・中の変化のみを検証するだけでは十分ではない。例えば、第2グループの変化を明らかにするためには、小学校時に英語が好きで、中学校時も英語が好きだった第1グループと比較する必要がある。



同様に、第3グループの変化を明らかにするは、小学校時に英語が嫌いで、中学校時も英語が嫌いだった第4グループと比較する必要がある。



4. 2. 1. 小学校時に英語が好きで中学校時に英語が嫌いだった生徒（第2グループ）

小学校時に英語が好きで中学校時に英語が嫌いだった生徒（第2グループ）の小学校時と中学校時の数値を項目ごとに算出し、小学校と中学校の数値に統計的な有意差があるか否かを検証した。ただし、「成績」の項目は中学校時のみ回答を求めているので、この分析からは除外している。そのため、対象となる項目は19項目となる。検証には前述の通りウィルコクソンの符号付順位和検定を用いた。表4が示す通り、19項目中11項目で有意差が確認されている。そのうち、「単語」「発音」「文法」「話す」「書く」「会話」「授業簡単」「ゲーム」「英語好き」「役立つ」の10項目（「歌」以外すべて）で小学校よりも中学校の数値が下がっており、これらが何らかの形で彼らが英語を嫌いになったことと関連している可能性がある。

さらに、「発音」「授業簡単」「英語好き」の3項目は、平均値が「3より大きい」から「3未満」へ変化している。今回のアンケートは各項目が5段階になっているため、「3」が中間点となる。3より大きな数字は肯定的な回答、3未満は否定的な回答と見ることができる。

表4 第2グループ（好き→嫌い）の変化

		小	中	Z	p	解釈
英語学習の得意・不得意に関する項目	Phonics	3.04 (1.21)	3.03 (0.96)	-0.156	0.876	NS
	単語	2.94 (1.14)	2.45 (1.15)	-3.853	0.000 **	小>中
	発音	3.06 (1.07)	2.84 (1.08)	-2.563	0.010 *	小>中
	文法	2.85 (1.22)	2.15 (0.91)	-5.152	0.000 **	小>中
	聞く	3.22 (1.15)	3.00 (1.11)	-1.677	0.094	NS
	話す	2.79 (1.16)	2.33 (1.05)	-3.852	0.000 **	小>中
	読む	2.93 (1.12)	2.83 (1.10)	-0.891	0.373	NS
	書く	2.86 (1.02)	2.59 (1.10)	-2.718	0.007 **	小>中
	会話	2.89 (1.09)	2.49 (0.94)	-3.904	0.000 **	小>中
	授業簡単	3.84 (1.04)	2.25 (0.92)	-7.464	0.000 **	小>中
英語学習の好き・嫌いに関する項目	歌	3.74 (0.99)	3.94 (1.03)	-2.319	0.020 *	小<中
	ゲーム	4.03 (0.94)	3.73 (1.03)	-3.287	0.001 **	小>中
	英語好き	3.53 (1.01)	2.28 (0.89)	-7.253	0.000 **	小>中
	授業好き	3.62 (0.94)	2.83 (0.84)	-1.667	0.096	NS
	教科書	3.36 (0.67)	3.58 (0.67)	-1.414	0.157	NS
英語の有用性に関する項目	役立つ	3.37 (1.13)	3.74 (1.19)	-4.060	0.000 **	小>中
	英語仕事	2.08 (0.79)	2.25 (0.87)	-0.816	0.414	NS
英語や英語圏への興味	英語圏	2.42 (1.08)	2.50 (1.24)	-0.447	0.655	NS
	旅行留学	1.58 (1.00)	1.83 (1.03)	-1.732	0.083	NS

「小」「中」の数値は平均値。カッコ内は標準偏差を表す。網掛けは変化が数値の「3」を跨いでいることを示す。

しかし、前述の通り、中学生時に英語が嫌いになった生徒たちの特徴を明らかにするには、小学校時は第2グループ同様に英語が好きで、中学生になっても英語が好きなままだった生徒、すなわち第1グループとの比較が必要である。そこで、まずは第1グループの小学校時と中学校時の好き・嫌いの変化に有意差があるかどうかを検証してみる必要がある。ウィルコクソンの符号付順位和検定を用いて各項目の小から中における変化に有意差があるか否かを検定したところ、「Phonics」「単語」「発音」「話す」「読む」「書く」「会話」「歌」「英語好き」「教科書」「役立つ」「英

語仕事」「英語圏」「旅行留学」の14項目で中学校の数値が有意に高かった（表5）。中学校時の数値が有意に低かったのは「授業簡単」の1項目で、それ以外の4項目は有意差がなかった。また、平均値はすべての項目で「3」を上回る数値になっており、小・中のいずれに対しても好意的な印象を持っていることがわかる。

表5 第1グループ（好き→好き）の変化

		小	中	Z	p	解釈
英語学習の得意・不得意に関する項目	Phonics	3.25 (1.20)	3.86 (0.81)	-6.775	0.000 **	小<中
	単語	3.14 (1.14)	3.45 (1.08)	-4.316	0.000 **	小<中
	発音	3.31 (1.11)	3.51 (1.01)	-3.144	0.002 **	小<中
	文法	3.17 (1.16)	3.20 (1.07)	-0.278	0.781	NS
	聞く	3.38 (1.16)	3.48 (1.10)	-1.491	0.136	NS
	話す	3.11 (1.10)	3.28 (1.00)	-2.829	0.005 **	小<中
	読む	3.42 (1.11)	3.74 (1.03)	-4.982	0.000 **	小<中
	書く	3.29 (1.08)	3.63 (1.03)	-4.748	0.000 **	小<中
	会話	3.16 (1.02)	3.33 (0.98)	-3.006	0.003 **	小<中
	授業簡単	3.96 (0.99)	3.35 (0.93)	-6.938	0.000 **	小>中
英語学習の好き・嫌いに関する項目	歌	3.89 (0.91)	4.16 (0.80)	-4.982	0.000 **	小<中
	ゲーム	4.02 (0.87)	4.03 (0.83)	-0.393	0.694	NS
	英語好き	3.91 (0.96)	4.03 (0.90)	-2.112	0.035 *	小<中
	授業好き	3.76 (0.87)	3.84 (0.84)	-1.469	0.142	NS
	教科書	3.51 (0.81)	3.92 (0.81)	-7.657	0.000 **	小<中
英語の有用性に関する項目	役立つ	3.94 (0.98)	4.51 (0.70)	-8.068	0.000 **	小<中
	英語仕事	3.08 (0.99)	3.30 (1.04)	-4.292	0.000 **	小<中
英語や英語圏への興味	英語圏	3.20 (1.07)	3.61 (1.09)	-7.288	0.000 **	小<中
	旅行留学	3.05 (1.24)	3.51 (1.29)	-6.719	0.000 **	小<中

「小」「中」の数値は平均値。カッコ内は標準偏差を表す。網掛けは変化が数値の「3」を跨いでいることを示す。

表4及び表5の結果をもとに、第2グループの生徒の変化を第1グループと比較した。各項目の小学校時及び中学校時の変化は「小<中」「小>中」「NS（変化なし）」のいずれかになるが、これらの組み合わせと解釈は以下の9通りとなる。

第1グループ 第2グループ

- 【1】「小<中」 「小<中」 →両グループは同じ（どちらも上昇）
- 【2】「小<中」 「小>中」 →第2グループは大きく下がった
- 【3】「小<中」 「NS」 →第2グループは上がらなかった
- 【4】「小>中」 「小<中」 →第2グループは大きく上がった
- 【5】「小>中」 「小>中」 →両グループは同じ（どちらも下降）
- 【6】「小>中」 「NS」 →第2グループは下がらなかった
- 【7】「NS」 「小<中」 →第2グループは上がった
- 【8】「NS」 「小>中」 →第2グループは下がった
- 【9】「NS」 「NS」 →両グループは同じ（どちらも変化なし）

解釈は第1グループの生徒を規準にすることも第2グループの生徒を規準にすることも可能だが（例えば、第1グループが「小<中」で、第2グループが「小>中」の場合、「第1グループは上がった」と「第2グループは下がった」の両者が可能）、本調査の関心の対象が第2グループなので、表現を統一するため、すべて第2グループの生徒を規準にした表現になっている。

上記の【1】【5】【9】のパターンのように、第1グループと第2グループが同じ変化を示しているとき、これらの項目は英語の好き・嫌いを分ける要因ではないと考えられる。【2】のように第1グループで中学校時の数値が上昇しているが、第2グループでは下がっている場合は、中学生になってから英語が嫌いになった要因である可能性がある。また、【3】では、第2グループに変化がないものの、第1グループの数値が上がっているので、相対的に第2グループは下がっており、英語が嫌いになった要因の候補と考えることができる。ただし、【2】のほうが両グループの変化の差が大きいと考えるため、解釈において「大きく」を加えてある。

以下同様に上記の組み合わせそれぞれに解釈を加えてあるが、この中で【2】【3】【8】のパターンが見られる項目が、英語の好き・嫌いを分けた要因の候補と考えられる。

表6が示す通り、19項目中15項目で両グループに違いが見られる。

【2】第2グループは大きく下がった：「単語」「発音」「話す」「書く」「会話」「英語好き」「役立つ」

【8】第2グループは下がった：「文法」「ゲーム」

【3】第2グループは上がらなかった：「Phonics」「読む」「教科書」「英語仕事」「英語圏」「旅行留学」

第1グループと違いがあった項目を見ると、第2グループが「上がらなかった」「下がった」のいずれかであった。いずれも、第2グループは第1グループと比べて相対的に回答が否定的になっている。よって、これらが、第2グループの生徒たちが英語を嫌いになった要因の候補と考えることができる。

表6 第2グループ（好き→嫌い）と第1グループ（好き→好き）の比較

		好き→好き (第1グループ)	好き→嫌い (第2グループ)	嫌いになった生徒は好きなままだった生徒に比べて、中学で
英語学習の得意・不得意に関する項目	Phonics	小<中	NS	【3】上がらなかった
	単語	小<中	小>中	【2】大きく下がった
	発音	小<中	小>中	【2】大きく下がった
	文法	NS	小>中	【8】下がった
	聞く	NS	NS	【9】同じ
	話す	小<中	小>中	【2】大きく下がった
	読む	小<中	NS	【3】上がらなかった
	書く	小<中	小>中	【2】大きく下がった
	会話	小<中	小>中	【2】大きく下がった
	授業簡単	小>中	小>中	【5】同じ
英語学習の好き・嫌いに関する項目	歌	小<中	小<中	【1】同じ
	ゲーム	NS	小>中	【8】下がった
	英語好き	小<中	小>中	【2】大きく下がった

英語学習の好き・嫌いに関する項目	授業好き	NS	NS	【9】 同じ
	教科書	小<中	NS	【3】 上がらなかった
英語の有用性に関する項目	役立つ	小<中	小>中	【2】 大きく下がった
	英語仕事	小<中	NS	【3】 上がらなかった
英語や英語圏への興味	英語圏	小<中	NS	【3】 上がらなかった
	旅行留学	小<中	NS	【3】 上がらなかった

4. 2. 2. 小学校時に英語が嫌いで中学校時に英語が好きになった生徒（第3グループ）

今回の調査でも、「小学校時に英語が好きだったが中学校時に嫌いになった生徒」（第2グループ）と共に「小学校時に英語が嫌いだったが中学校時に好きになった生徒」（第3グループ）も相当数確認できた。前項で第2グループの変化に関わる要因を検討したが、第3グループの変化に関わる要因、すなわち英語が好きになった要因も併せて検討することで、英語の好き・嫌いに関わる要因を絞り込みたい。

ここで小・中の数値の違いが確認できた項目は「英語が好きになった要因」の候補として挙げることができる。また、前述の「英語が嫌いになった要因」と共通する要因があれば、それらは「英語の好き・嫌いを分ける要因」の候補と考えても良いだろう。

はじめに、英語が好きから嫌いに転じた第3グループの結果を確認する。ウィルコクソンの符号付順位検定を用いて比較したところ、表7が示す通り、19項目中18項目で有意差が確認されている。また、すべて小学校時よりも中学校時の数値のほうが統計的に有意な差をもって高くなっている。

さらに、「Phonics」「単語」「発音」「文法」「聞く」「読む」「書く」「英語が好き」「英語の授業が好き」「教科書は役に立つ」「英語で仕事をしたい」「英語圏への関心」「英語圏に旅行や留学をしたい」の13項目は、平均値が「3未満」から「3より大きい」へ変化しており、単に数値が大きくなっただけではなく、否定的な回答から肯定的な回答に変化している。

表7 第3グループ（嫌い→好き）の変化

		小	中	Z	p		解釈
英語学習の得意・不得意に関する項目	Phonics	2.26 (1.13)	3.58 (0.83)	-5.707	0.000	**	小<中
	単語	2.22 (1.06)	3.26 (0.99)	-5.398	0.000	**	小<中
	発音	2.45 (1.13)	3.01 (0.92)	-3.987	0.000	**	小<中
	文法	2.46 (1.22)	3.15 (1.06)	-3.461	0.001	**	小<中
	聞く	2.52 (1.09)	3.01 (1.03)	-3.699	0.000	**	小<中
	話す	2.23 (1.02)	2.95 (0.91)	-4.321	0.000	**	小<中
	読む	2.52 (1.08)	3.40 (0.94)	-3.859	0.000	**	小<中
	書く	2.26 (1.08)	3.53 (1.02)	-4.942	0.000	**	小<中
	会話	2.39 (1.04)	2.74 (0.94)	-2.874	0.004	**	小<中
	授業簡単	3.15 (1.23)	3.29 (0.87)	-0.671	0.502		NS
英語学習の好き・嫌いに関する項目	歌	3.13 (1.10)	3.99 (0.81)	-5.432	0.000	**	小<中
	ゲーム	3.33 (1.22)	3.61 (1.02)	-2.580	0.010	**	小<中
	英語好き	2.15 (0.91)	3.86 (0.87)	-6.695	0.000	**	小<中
	授業好き	2.35 (0.95)	3.86 (0.81)	-6.461	0.000	**	小<中
	教科書	2.70 (0.87)	3.61 (0.87)	-5.470	0.000	**	小<中

英語の有用性に関する項目	役立つ	3.10 (1.23)	4.30 (0.81)	-5.858	0.000	**	小<中
	英語仕事	2.44 (0.98)	3.07 (1.03)	-4.865	0.000	**	小<中
英語や英語圏への興味	英語圏	2.38 (1.29)	3.31 (1.25)	-5.717	0.000	**	小<中
	旅行留学	2.29 (1.26)	3.03 (1.37)	-4.953	0.000	**	小<中

「小」「中」の数値は平均値。カッコ内は標準偏差を表す。網掛けは変化が数値の「3」を跨いでいることを示す。

続いて、第3グループの比較対象として、第4グループを検討する。このグループで小学校時と中学校時の数値に有意な差が確認できたのは、19項目中「授業は簡単」「歌」「授業は好き」「教科書は役立つ」「英語は将来役立つ」の5項目で、そのうち「授業は簡単」は数値が下がっており、それ以外は数値が高くなっている。また、ほとんどの値が「3未満」となっており、小・中を通じて否定的な回答になっている。

表8 第4グループ（嫌い→嫌い）の変化

		小	中	Z	p		解釈
英語学習の得意・不得意に関する項目	Phonics	2.10 (1.10)	2.45 (1.13)	-3.010	0.003	**	小<中
	単語	1.86 (1.01)	1.92 (1.05)	-0.772	0.440		NS
	発音	1.99 (0.96)	2.06 (0.96)	-0.823	0.411		NS
	文法	1.91 (1.10)	1.79 (1.03)	-1.025	0.305		NS
	聞く	2.08 (1.10)	2.12 (1.00)	-0.257	0.797		NS
	話す	1.80 (0.90)	1.77 (0.89)	-0.715	0.474		NS
	読む	2.09 (1.03)	2.08 (1.08)	-0.745	0.456		NS
	書く	1.97 (1.11)	2.03 (1.09)	-0.681	0.496		NS
	会話	1.79 (0.95)	1.76 (0.88)	-1.015	0.310		NS
	授業簡単	2.63 (1.32)	1.89 (0.94)	-4.918	0.000	**	小>中
英語学習の好き・嫌いに関する項目	歌	2.98 (1.31)	3.26 (1.35)	-2.867	0.004	**	小<中
	ゲーム	2.76 (1.23)	2.68 (1.22)	-0.716	0.474		NS
	英語好き	1.85 (0.96)	1.75 (0.95)	-0.704	0.482		NS
	授業好き	1.95 (0.86)	2.14 (1.02)	-2.244	0.025	*	小<中
	教科書	2.73 (0.89)	3.01 (0.96)	-3.781	0.000	**	小<中
英語の有用性に関する項目	役立つ	2.85 (1.27)	3.41 (1.32)	-4.430	0.000	**	小<中
	英語仕事	1.72 (0.85)	1.84 (0.94)	-1.365	0.172		NS
英語や英語圏への興味	英語圏	1.95 (1.15)	2.07 (1.21)	-1.873	0.061		NS
	旅行留学	1.86 (1.16)	1.96 (1.26)	-1.116	0.264		NS

「小」「中」の数値は平均値。カッコ内は標準偏差を表す。網掛けは変化が数値の「3」を跨いでいることを示す。

次に、第3グループ及び第4グループの結果を比較する。第1グループと第2グループの比較と同様に、以下のパターンが考えられる。表記を統一するため、第3グループを規準とした表記にしている。

第3グループ 第4グループ

- 【1】「小<中」 「小<中」→両グループは同じ（どちらも上昇）
【2】「小<中」 「小>中」→第3グループは大きく上がった
【3】「小<中」 「NS」→第3グループは上がった

- 【4】「小>中」 「小<中」→第3グループは大きく下がった
 【5】「小>中」 「小>中」→両グループは同じ（どちらも下降）
 【6】「小>中」 「NS」→第3グループは下がった
 【7】「NS」 「小<中」→第3グループは上がらなかった
 【8】「NS」 「小>中」→第3グループは下がらなかった
 【9】「NS」 「NS」→両グループは同じ（どちらも変化なし）

下線を施した【2】【3】【8】のパターンを示した項目が、第3グループの生徒が英語を好きになった要因の候補として考えられる。

表9が示す通り、下記の15項目で両グループの変化の違いが確認された。

- 【3】第3グループは上がった：「単語」「発音」「文法」「聞く」「話す」「読む」「書く」「会話」「ゲーム」「英語好き」「役立つ」「英語仕事」「英語圏」「旅行留学」
 【8】第3グループは下がらなかった：「授業簡単」

上記の通り、両グループの変化に違いが見られたのは、第3グループが「上がった」「下がらなかった」のいずれかであった。いずれも、第3グループは第4グループと比べて相対的に回答が肯定的になっている。よって、これらが、第3グループの生徒たちが英語を好きになった要因の候補と考えることができる。

表9 第3グループ（嫌い→好き）と第4グループ（嫌い→嫌い）との比較

		嫌い→好き (第3グループ)	嫌い→嫌い (第4グループ)	好きになった生徒は嫌いなままだった生徒に比べて、中学で
英語学習の得意・不得意に関する項目	Phonics	小<中	小<中	【1】同じ
	単語	小<中	NS	【3】上がった
	発音	小<中	NS	【3】上がった
	文法	小<中	NS	【3】上がった
	聞く	小<中	NS	【3】上がった
	話す	小<中	NS	【3】上がった
	読む	小<中	NS	【3】上がった
	書く	小<中	NS	【3】上がった
	会話	小<中	NS	【3】上がった
	授業簡単	NS	小>中	【8】下がらなかった
英語学習の好き・嫌いに関する項目	歌	小<中	小<中	【1】同じ
	ゲーム	小<中	NS	【3】上がった
	英語好き	小<中	NS	【3】上がった
	授業好き	小<中	小<中	【1】同じ
	教科書	小<中	小<中	【1】同じ
英語の有用性に関する項目	役立つ	小<中	小<中	【1】同じ
	英語仕事	小<中	NS	【3】上がった
英語や英語圏への興味	英語圏	小<中	NS	【3】上がった
	旅行留学	小<中	NS	【3】上がった

4. 2. 3. 英語が嫌いになった生徒と好きになった生徒の比較

最後に、以上の2つの比較（「第1グループ対第2グループ」と「第3グループ対第4グループ」）の両方で変化を示した項目を確認する。これらの項目が、英語の好き・嫌いに大きく関わっている可能性がある。なお、見やすさを考慮して、「同じ」という結果を示した項目のセルは空欄にしている。

表10 英語が好きになった生徒と嫌いになった生徒の比較

		嫌いになった生徒は好きなままの生徒に比べて、中学で	好きになった生徒は嫌いのままの生徒に比べて、中学で	
英語学習の得意・不得意に関する項目	Phonics	【3】 上がらなかった		
	単語	【2】 大きく下がった	【3】 上がった	◎
	発音	【2】 大きく下がった	【3】 上がった	◎
	文法	【8】 下がった	【3】 上がった	○
	聞く		【3】 上がった	
	話す	【2】 大きく下がった	【3】 上がった	◎
	読む	【3】 上がらなかった	【3】 上がった	○
	書く	【2】 大きく下がった	【3】 上がった	◎
	会話	【2】 大きく下がった	【3】 上がった	◎
	授業簡単		【8】 下がらなかった	
英語学習の好き・嫌いに関する項目	歌			
	ゲーム	【8】 下がった	【3】 上がった	○
	英語好き	【2】 大きく下がった	【3】 上がった	◎
	授業好き			
	教科書	【3】 上がらなかった		
英語の有用性に関する項目	役立つ	【2】 大きく下がった		
	英語仕事	【3】 上がらなかった	【3】 上がった	○
英語や英語圏への興味	英語圏	【3】 上がらなかった	【3】 上がった	○
	旅行留学	【3】 上がらなかった	【3】 上がった	○

表10が示す通り、以下の12項目が両方の比較に現れている。

「単語」「発音」「文法」「話す」「読む」「書く」「会話」「ゲーム」「英語好き」「英語の仕事」「英語圏への関心」「英語圏への旅行・留学」

また、「単語」「発音」「話す」「書く」「会話」「英語好き」の項目は、第1グループと第2グループの比較で数値が「大きく」下がった項目であり、他の項目よりも影響が大きいと考えられる。

4. 2. 3. 英語の成績がつくこと

アンケート項目の中に「中学校では英語のテストがありますが、テストやそれにより成績がつくことをどう思いますか？」がある。これは、文献で英語のできる・できないという要因が関連していることが指摘されているためである。テストや成績は英語のできる・できないという意識との結びつきが強く、英語の好き・嫌いが英語のできる・できないと関連していることを示すことができ

るのではないかと考えたため、アンケート項目とした。

第1～4グループの間に上記の項目について有意差が存在するか否かを一元配置の分散分析（対応なし）で検証したところ、表13が示す通り、グループ間に有意差があることが確認された（ $p=0.000$ ）。また、多重比較により（表14）、第1グループと第2グループ間に、また第3グループと第4グループの間にそれぞれ有意差があることが確認された。また、平均値を見ても、第1と第3グループはそれぞれ数値が3を超えているが、第2グループと第4グループはいずれも3を下回っている。すなわち、小学校時の好き・嫌いには関わらず、中学校時に英語が好きと答えた生徒はテストや成績に好印象を持っており、他方、中学校時に英語が嫌いだと答えた生徒はテストや成績に否定的な印象を持っている。もちろん、これらは因果関係を示すものではないため、英語が好きだったからテストや成績への印象が良くなったのか、テストや成績への印象が良かったから英語が好きになったのかは解明できない。また、テストや成績への好印象がそのままテストで良い成績を取っていることにはならない。しかし、これら2つの要因が関連していることは十分指摘できるだろう。

表11 英語の成績がつくことに対する回答の記述統計

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値の95%信頼区間		最小値	最大値
					下限	上限		
1	222	3.29	1.153	0.077	3.14	3.45	1	5
2	93	2.33	1.036	0.107	2.12	2.55	1	5
3	69	3.36	1.084	0.131	3.1	3.62	1	5
4	95	2.11	1.096	0.112	1.88	2.33	1	5
合計	479	2.88	1.231	0.056	2.77	2.99	1	5

表12 英語の成績がつくことに対する回答の等分散性

Levene 統計量	自由度1	自由度2	有意確率
.233	3	475	.873

表13 英語の成績がつくことに対する回答の分散分析結果

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間	138.693	3	46.231	37.504	.000
グループ内	585.525	475	1.233		
合計	724.217	478			

4. 2. 4. その他の項目

小学校時あるいは中学校時に塾やテレビ等で英語を学んでいた経験と英語の好き・嫌いに関連があるかないかを一元配置の分散分析（対応なし）で検証したところ、有意差が確認できた項目は皆無であった。

5. 考察

本稿は小学校時から中学校時に移行する中で英語が好きあるいは嫌いになった生徒の割合とその変化に関わる要因を調査することであった。具体的には以下の2つのリサーチ・クエスチョンを

表14 英語の成績がつくことに対する回答の多重比較

(I) 変化			平均値の差 (I - J)	標準誤差	有意確率	95%信頼区間	
						下限	上限
Bonferroni	1	2	.959*	.137	.000	.60	1.32
		3	-.070	.153	1.000	-.47	.34
		4	1.188*	.136	.000	.83	1.55
	2	1	-.959*	.137	.000	-1.32	-.60
		3	-1.029*	.176	.000	-1.50	-.56
		4	.228	.162	.958	-.20	.66
	3	1	.070	.153	1.000	-.34	.47
		2	1.029*	.176	.000	.56	1.50
		4	1.257*	.176	.000	.79	1.72
	4	1	-1.188*	.136	.000	-1.55	-.83
		2	-.228	.162	.958	-.66	.20
		3	-1.257*	.176	.000	-1.72	-.79

設定した。

RQ-1：小学校時に英語が好きだったが中学校時に英語が嫌いになった生徒と小学校時に英語が嫌いだったが中学校時に英語が好きになった生徒の全生徒に占める割合はそれぞれ何パーセントか。

RQ-2：RQ-1で明らかになった2つのグループの生徒たちの変化に関わる要因は何か。

RQ-1に関しては、中学3年生を対象にしたアンケートの結果、小学校時に英語が好きで中学校時に嫌いになった生徒（第2グループ）は全体の19.0%で、全体の約5分の1にあたる。この数字が大きいかわ小さいかわを示す絶対的な基準は存在しないが、過去の調査結果を参照すると、國友（2012）が13%、井田（2015）が22%、及川（2015）が8.8%となっており、数値にばらつきがある。ただし、及川は予備調査的な性格を持っているため、調査参加者が57名と少なく、全体的な傾向を知るには不向きであろう。國友の参加者は134名とやや増え、井田は757名で、本調査を含む4調査の中で最も人数が多い。本調査の被験者は510名と最も近い数値である井田の22%と近い結果になっており、約20%付近が、現段階では、英語が好きから嫌いに変化した生徒の割合だと考えられる。一方で、小学校時に英語が嫌いで中学校時に英語が好きになった生徒（第3グループ）の割合は14.3%であった。同様のグループの割合が國友では17%、井田では20%で、類似した数値となっている。本調査のきっかけである「小学校時は英語が好きだったが中学校で英語が嫌いになった」生徒は一定数存在するものの、その逆のパターンの生徒も少なからず存在することがこれまで及び今回の調査から明らかになった。

RQ-2は上記の第2グループ及び第3グループの変化の要因に関わる。「原因」ではなく「要因」という表現を用いているのは、前述の通り、今回の調査形式が厳密には因果関係を示すに至らないからである。

英語が好きから嫌いに変化した第2グループの要因を探るため、英語が小学校時も中学校時も好きだった第1グループと比較を行ったところ、以下の項目で両グループの違いが見られた。

第2グループは大きく下がった：「単語」「発音」「話す」「書く」「会話」「英語好き」「役立つ」

第2グループは下がった：「文法」「ゲーム」

第2グループは上がらなかった：「Phonics」「読む」「教科書」「英語仕事」「英語圏」「旅行留学」

ここでの「下がった」「上がらなかった」という表現は中学校時の数値を規準にした表現になっている。19項目中15項目で差が見られ、この段階で要因を絞り込むことが難しい。

一方、中学校になってから英語が好きになった第3グループの変化の要因は、英語が嫌いなままであった第4グループとの比較から導き出した。以下の15項目が変化の要因として挙げられた。

第3グループは上がった：「単語」「発音」「文法」「聞く」「話す」「読む」「書く」「会話」「ゲーム」「英語好き」「役立つ」「英語仕事」「英語圏」「旅行留学」

第3グループは下がらなかった：「授業簡単」

第2グループの変化の要因は英語が「嫌い」になった要因で、第3グループのそれは英語が「好き」になった要因である。正反対の方向を示しているようだが、「好き・嫌いが変化した」という点では共通点がある。ゆえに、上記の項目の共通項が英語の好き・嫌いを分ける要因としてより深く関わっている可能性があるので、確認してみる必要がある。両グループに共通するのは以下の13項目である。

「単語」「発音」「文法」「話す」「読む」「書く」「会話」「ゲーム」「英語好き」「英語の仕事」「英語圏」「旅行・留学」

このうち、以下の6項目が、第2グループと第1グループの比較において、より大きな差異を示しており、今回調査した中でも、英語の好き・嫌いに大きく関わっている可能性が高い。

「単語」「発音」「話す」「書く」「会話」「英語好き」

上記6項目のうち、「単語」「発音」「話す」「書く」「会話」の5項目は、英語のできる・できないに関わる項目である。この点は國友、井田、及川と同様に「英語ができる・できない」に関わる要因が好き・嫌いに関わっている可能性を示すことになるであろう。また、英語の「成績」がつくことに対する反応を見ても、中学校時に英語が好きだと回答した第1及び第3グループの生徒は、それぞれの比較対象である第2グループ、第4グループよりも有意に高い数値を示している。ここから、英語のできる・できないが好き・嫌いに関わっている可能性が指摘できるであろう。

これら6項目に共通するものは何であろうか。1つは「単語」で表される「語彙力」であろう。國友（2015）でも単語が覚えられること、あるいは覚えられないことが、英語の好き・嫌いを分ける要因になっていることが指摘されているが、語彙力は他の項目と比べて、出来不出来が生徒本人にも認識しやすい。そのため、英語の好き・嫌いに関わっている可能性が高い。また、「発音」「話す」「書く」「会話」はすべてアウトプット（産出）の技能を含んでいる。「話す」「書く」のように英語を産出する活動を苦手と感じる生徒が多いことがたびたび指摘されている点を考えても、産出に関わるこれらの項目が英語の好き・嫌いの変化に寄与した可能性は十分にあるだろう。

一方、「英語好き」は他の5項目と比べると、因果関係の指摘が難しい。繰り返すが、本調査は研究デザイン上、因果関係を示すことが難しい。しかし、「単語」「発音」「話す」「書く」「会話」の項目は因果関係を示した國友や井田とも共通しており、その可能性を述べることは許されるであろう。しかし、「英語そのものが好き」は英語そのものに関心があるから学校の英語が好きになったのか、学校の英語が好きだから英語そのものへの関心が高まったのかを特定することは難しい。

よって、本稿では英語が好き・嫌いになる要因として特に「語彙力」と「産出力」を指摘したい。この結論は及川（2015）と同じ結論になっている。今回の調査で因果関係を証明することはできないが、中学校1年生の入門期においては特にこれらに力を入れて指導に当たることが生徒の英語嫌いを減少させることにつながる可能性があるだろう。

6. おわりに

本稿は小学校時から中学校時に移行する過程で英語が好きまたは嫌いになる要因の抽出を試み、暫定的ながら「単語を覚えることは得意」「英語を発音することは得意」「英語を話すことは得意」「英語を書くことは得意」「英語で会話をすることは得意」「英語そのものが好き」という要因が大きく関わっている可能性があることを指摘できた。特に、英語の能力に関わるはじめの5項目は「語彙力」と「発表力」にまとめることがで、この2つが英語の好き・嫌いを分ける要因である可能性がある。

本調査は、その予備的調査である及川（2015）の問題点であった参加者の少なさや統計手法の問題点は克服できた。しかし、参加者は4校に限られており、また、各小学校や中学校の授業内容の違いなどは考慮に入れていない。今後は個別事例による因果関係の検証などを通じて、英語の好き・嫌いに関する要因を明らかにしていく必要があるだろう。

注

本稿は関東甲信越英語教育学会第39回山梨研究大会での自由研究発表での口頭発表に加筆・修正を加えたものである。

参考文献

- 井田真由美（2015）『コミュニケーション能力の素地を養う外国語活動の研究～小中連携の視点から、これからの教員研修のあり方を考える～』（平成26年度埼玉県長期研修教員研究報告書）
- 英語教育の在り方に関する有識者会議（2014）「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」
- http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm（2015年9月30日現在）
- 及川賢（2015）「英語学習への意識の変化に関わる要因—小学校時及び中学校時の英語の好き・嫌いとの関係—」『埼玉大学紀要 教育学部』第64巻 第2号、pp.199-212
- 國友達朗（2012）「小学校『外国語活動』・中学校『英語』嫌いの原因を探る」（埼玉大学教育学部提出の卒業論文）
- 竹内理・水本篤編著（2014）『外国語教育研究ハンドブック【改訂版】 研究手法のより良い理解のために』（松柏社）
- 文部科学省（2014）「平成25年度公立小学校における英語教育実施状況調査の結果について」
- http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfi

le/2014/09/03/1351570_04.pdf (2015年9月30日現在)

Benesse教育開発センター (2011)「第2回小学校英語に関する基本調査(教員調査) 2010 ダイジェスト」
株式会社ベネッセコーポレーション

<http://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=3179> (2015年9月30日現在)

Benesse教育開発センター (2012)「小・中学校の英語教育に関する調査～中学1年生の目から見た英語教育とは?～速報版」株式会社ベネッセコーポレーション

<http://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=3178> (2015年9月30日現在)

(2015年9月30日提出)

(2015年10月7日受理)

付録 (アンケート用質問項目)

- 01 はじめて見る英単語の読み方がすぐにわかりましたか?
- 02 英単語や英熟語を覚えることは得意でしたか?
- 03 英語を発音することは得意でしたか?
- 04 英語の文法は得意でしたか?
- 05 英語を聞くことは得意でしたか?
- 06 英語を話すことは得意でしたか?
- 07 英語を読むことは得意でしたか?
→小学校で英語の文章を読んだことがなければ「中1～2」のみ記入。
- 08 英語を書くことは得意でしたか?
→小学校で英語の文を書いたことがなければ、「中1～2」のみ記入。
- 09 先生や友達と英語で会話をすることは得意でしたか?
- 10 授業の内容は簡単でしたか?
- 11 中学校では英語のテストがありますが、テストやそれにより成績がつくことをどう思いますか?
- 12 英語の授業で英語の歌を歌うことは好きでしたか?
- 13 英語の授業でゲームやコミュニケーション活動をするのは好きでしたか?
- 14 英語を学ぶと将来の自分に役立つと思っていましたか?
- 15 英語は好きでしたか?
- 16 英語の授業は好きでしたか?
- 17 将来英語を使って仕事をしたいと思っていましたか?
- 18 アメリカ、オーストラリア、イギリスなどの英語圏に興味関心がありましたか?
- 19 将来英語を使える国(アメリカ、オーストラリア、インドなど)に旅行や留学をしたいと思っていましたか?
- 20 小学校、中学校で使った英語の教科書をどう思いますか?
- 21 学校以外で英語を学んでいましたか?あてはまるものすべてにマルをつけてください。
小学校のとき:英会話教室 テレビ・ラジオの英語番組 学習塾(英語以外の教科がある

塾も含む) 通信教育 (英語) 家庭教師 (英語) その他

中学校のとき: 英会話教室 テレビ・ラジオの英語番組 学習塾 (英語以外の教科がある

塾も含む) 通信教育 (英語) 家庭教師 (英語) その他

- 22 小学校や中学校の英語の授業・学習で印象に残っていることがあれば書いてください (例: ゲーム、ALTとの活動、歌、単語の勉強、発音の練習)。それぞれいくつでも構いません。
- 23 これから小学校で英語を学ぶ4年生 (4月から5年生) にアドバイスをするとしたら、どんなことをアドバイスしますか? 下の空欄に書いてください。
- 24 その他、小学校・中学校の英語の授業について思うことがありましたら、自由に書いてください。